

## 6 羽生の偉人・清水卯三郎



みなさんは、知っていますか。かの有名な清水卯三郎を。彼は、文政十二年（一八二九年）三月四日、清水家の三男として羽生の地に生まれました。

卯三郎は、パリ万博ばんぱくにおいて、刀剣とうけん、人形にんぎょう、扇子せんす、ちようちんなど、日本ならではの様々な品物を揃えそろ、出品しました。個人で出品したのは、彼一人でした。また、日本で初めて印刷機を輸入したり、我が国初の歯科器械工場を作り足踏みエンジンや治療りょうイスまでも製作・販売したりしました。そして、日本文化向上のためには、日本で万博を開く必要がある、と考え、建白書けんぱくしよを提出しました。このように、卯三郎は、商人として活躍やくをした人物として大変有名です。

そんな卯三郎は、実は、学者としても数多くの輝かがやかしい功績こうせきを残した人物でなのです。子どもの頃ころ、卯三郎の家の天井てんじやうに、オランダ語で書かれた格言かくげんが貼り付けてありました。それは、漢学を学んできた卯三郎には、読めない文字でした。卯三郎は、それを眺めては「この文字が読めたらオランダの書物が読める。そうすれば：」と、ずっと思い続けてきました。当時、蘭学らんがくはほんのわずかの入しか学んでいない学問でした。「そうだ、蘭学を学ぼう。」卯三郎十九才の時でした。

卯三郎は、自分の支えであった母を亡くし、心が折れそうになっても、学ぶことをやめませんでした。

卯三郎は、佐藤泰然、箕作げんぽらに蘭学を学びました。その後、約十年間、来る日も来る日も勉強に励み、ようやくオランダ語を習得することができました。

「これでオランダ語を生かせるぞ。」

卯三郎は、大豆で商売をしようと、意気揚々と横浜へ向かいました。

「大豆はいかがですか。品質は最高ですよ。」（オランダ語で）

ところが、一生懸命学んだオランダ語を話しても外国人に通じません。行き交う一人、また一人……。いくら話しかけても通じず、彼らが話す言葉さえも理解できませんでした。

「これは、いったいどういことだ。」

卯三郎は、愕然としました。

その頃の日本には、アメリカ人やイギリス人が多くいたのです。すでに英語が外国人との会話の主流であったのです。

「おれのこの十年間は、一体何だったのだろう。ここで終わってしまうというのか……。」

卯三郎は、途方に暮れる毎日でした。

そんな日が何日も続いた日のこと、卯三郎は、子どもの頃天井を眺め続けていた時のことを思い出したのです。

「そうだ、英語を、英語を学ぼう！でも……、どうしたらよいのだろう。」

卯三郎は悩み続けました。そんな卯三郎のもとにある日、



友人から、アメリカ人に日本語を教えられる人物を探しているという話がまいこんできました。日本語を教える、彼より英語が学べる。しかも、暮らしていくためのお金も手に入る。卯三郎にとってこれ以上の条件はなかったのです。その後卯三郎は、一年間必死に英語を学び続けました。

オランダ語を習得していた卯三郎にとって、英語は意外に早く身につけることができました。それは、直接アメリカ人から教わり、オランダ語も英語も横文字で文章の組み立てが似ていたためでした。しかし、そこには、卯三郎の血のにじみでるような努力があったことは言うまでもありません。

### 清水卯三郎

清水卯三郎（しみずうさぶろう）は一八二九年、現在の羽生市中央四丁目生まれ。生来の才能と向学心で世界に目を向け、日本の文化発展に貢献した。一八六三年の薩英戦争に際しては、通訳として英国軍艦に乗り込み、日本の平和のために活躍。また一八六七年のバリ万国博覧会に日本から唯一の商人として参加し日本の文化を世界に紹介した。帰国後は日本でも万国博覧会を開催すべしとの建白書を政府に提出。その百年後に卯三郎の夢は実現された。その後、浅草に瑞穂屋（みづほや）を創立し歯科図書などの出版や歯科医療機器の輸入販売を手掛け、近代歯科医学の発展に寄与。さらに「むらがな表記」を提唱するなど、多方面にわたる日本文化の向上に尽くした功績は郷土の誇りである。一九一〇年一月二十日 八十二歳で死去、市内正光寺に眠る。

二〇〇七年十二月十九日建立

清水卯三郎を顕彰する会  
羽生市観光協会

こうして卯三郎は、その語学力をいかんなく発揮し、商人実用英会話辞書「えゑんぎりしことば」を出版するまでにこぎつけました。努力が実を結び、その後の卯三郎のあきない商魂に火を付けたのでした。商人清水卯三郎の誕生でありました。後に卯三郎は、たん堪能な語学力を買われ、さつま薩摩藩と英国の間に起こった戦争で、英船に乗艦し、通訳としても活躍しました。かの福沢諭吉からも卯三郎の向学心・チャレンジ精神をたたえる言葉が残されています。

(注釈)

建白書：…こうしてもらいたいという意見を申し述べる書

(新明解 国語辞典 三省堂)

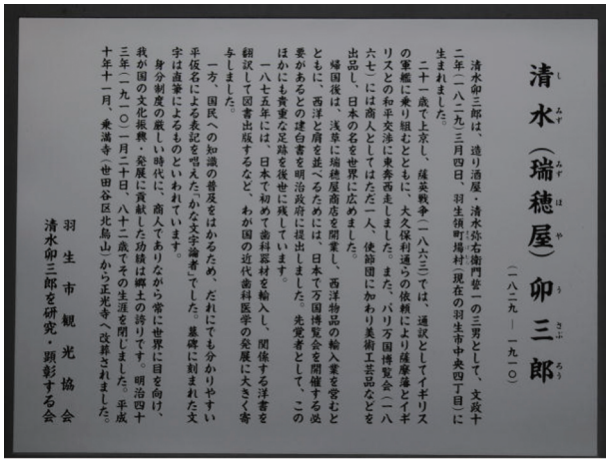
商人実用英会話辞書「ゑんぎりしことば」：上下2巻からなる辞書。発音をカナ文字で表している。商人には人気があった。今でいう海賊版「飛良賀奈英米通語」(違法にコピーされた出版物)が出回ったそうだ。(羽生市立図書館こども資料21より)

〈参考文献〉

郷土・羽生の先覚者 しみずうさぶろう 渡辺隆夫著 御園書房



【清水卯三郎の墓 (正光寺)】



清水(瑞穂屋)卯三郎

(一八二九—一九一〇)

清水卯三郎は、通り酒屋・清水右衛門堂一の三男として、文政十二年(一八二九)三月四日、羽生磯町堀村(現在の羽生市中央四丁目)に生まれました。  
二十一歳で上京し、薩英戦争(一八六三)では、通訳としてイギリスの軍艦に乗り組むとともに、大久保利通らの依頼により薩摩藩とイギリスとの和平交渉に参画しました。また、パリ万国博覧会(一八六七)には商人として一人、使節団に加わり美術工芸品などを出品し、日本の名を世界に広めました。  
帰国後は、汽船に瑞穂屋商店を開業し、西洋物品の輸入業を営むとともに、西洋と所を並べるためには、日本で万国博覧会を開催する必要があるとの建白書を明治政府に提出しました。先覚者として、このほかにも貴重な足跡を後世に残しています。  
一八七五年には、日本で初めて歯科器材を輸入し、関係する洋書を翻訳して回書出版するなど、わが国の近代歯科医学の発展に大きく寄与しました。

一方、国民への知識の普及をはかるため、だれでも分かりやすい平仮名による表記を導入した(かな文字論)著書『文字の革命』を著し、身分制度の厳しい時代に、商人でありながら常に世界に目を向け、我が国の文化振興・発展に貢献した功績は顕著です。明治四十三年(一九一〇)一月二十日、八十二歳でその生涯を閉じました。平成十年十一月、兼満寺(世田谷区北烏山)から正光寺へ改葬されました。

羽生市 観光協会  
清水卯三郎を研究・顕彰する会